

「二度と不便な思いをさせたくない」・・・

買い物弱者の暮らしを支える女性移動販売人

2023.2.17 ANN NEWS

日本有数の豪雪地・福島県只見町。

過酷な冬、移動販売人にはさまざまな障害がありました。それでも、「住民を買い物弱者にはさせない」という強い信念の裏には、特別な思いがありました。



只見町はこの時期、一面雪に覆われた銀世界に・・・。

町の住民は 4,000 人足らず、およそ半数を 65 歳以上の高齢者がしめる、過疎の町です。

住民：「雪でタンが弾けちゃって。空き家もけっこうあって、年寄りばかりで。特に山間部はすごい高齢化がすすんでいる。」

そんなこの町には、高齢者たちに愛される“救世主”がいます。

この町で育った角田 玲さん(48)が移動販売を切り盛りしています。



常連客(76):「こっちにはなくてはならない人。年寄りの所、来てくれるんだもん。ありがたいわ」

生鮮品や日用雑貨など、商品はおよそ 300 種類。公共交通が無いエリアを中心に回っています。玲さんは、移動販売を始めてから 2 年たらずですが…。



客:「あとアレあつかえ?アノ..なんだっけ...やだでてこねえ」

玲さん:「ふりかけ?」

客:「まんま...」

玲さん:「お茶漬け?」

客:「お茶漬け」

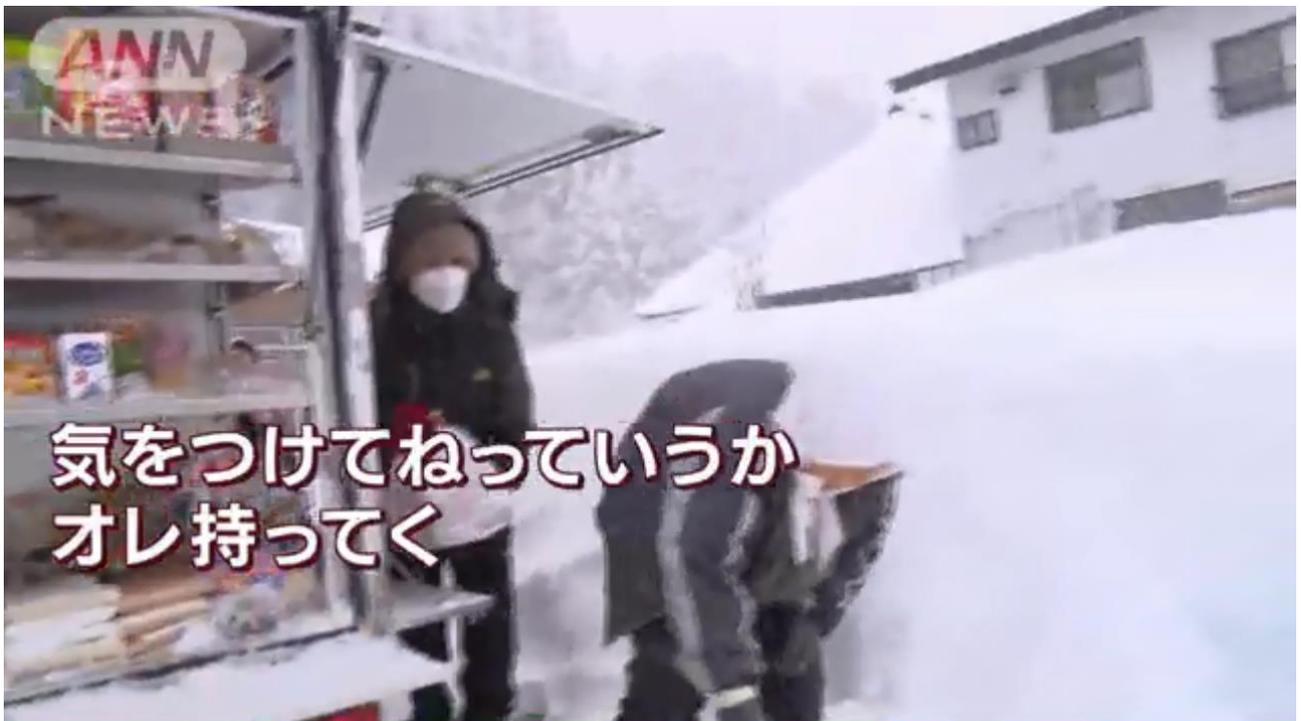
玲さん:「はい!出てきた~」

欲しい物はお見通し!お客さんとの距離が近いのです。

玲さん:「卵入っているから気を付けて」

客:「だいじょうぶだ」

玲さん:「よく結んどくは結んどくけど。きをつけてねっていうか、オレ持っていく」





お客さんを気遣い当たり前のように届ける玲さん。

常連客(92):「よくやってくれる、やさしく。楽しみ、週に1回来るの」

玲さん:「年配の人たちが移動手段がだんだん減っているのは分かった。やっぱり移動販売。見て買ってもらいたい。品物を見て選んで買ってもらいたいという、そういう気持ちもあった。」



■ 不便解消だけではなく・・・“交流の輪”作りも

玲さんの販売エリアには、スーパーが 1 軒もありません。日常の買い物ほぼ全てを、玲さんに頼らざるを得ない高齢者は少なくないといえます。



飯塚さん(80)、夫(88)と2人暮らしです。

冬場は買い物に出られないため、食卓に並ぶのは、夏場に自分たちで育てた野菜の漬物など、保存食がメインだといえます。

飯塚さん:「まあしょうがねーなーって、我慢するしかなかった。今はもう1週間に1回来てもらえると思うと。大体1週間分買うと、また玲ちゃん来てくれるっておもうから」

週に一度、玲さんが届けてくれる新鮮な生鮮食品や果物を買うのが、何よりの楽しみだといえます。

さらに、買い物の不便さを解消しただけではありません。

自宅に閉じこもりがちだった高齢者が、移動販売をきっかけに交流の輪が生まれたのです。



買い物の不便さ解消…だけじゃない!



常連客(70)

常連客(82)

常連客(75)

楽しくなかったら集まらないよな

常連客(75):「楽しくなかったら集まらないよな」

常連客(70):「1人でうつうつといるよりも、キャハハって。ストレス発散だよな」

■ 「収支はトントン」 雪国の事情で値上げできず

強烈な寒波の相次ぐ中、移動販売人の雪国ならではの過酷さとは…?

玲さん:「ホントおっかなくて(スピード)出せない……。ずーっとこういう状態」

商品を仕入れる市場までは、片道およそ 90 キロ。

路面が凍結する冬場は、倍近い時間がかかるため、出発は早朝です。

移動だけで往復 5 時間かかり、安くて新鮮な食材を手に入れるにはかかせないといいます。

そして、何をするのも、とにかく雪との戦いです。





常連客(86):「オレ歩くっぺと思う所(雪)退けといてくれたり、ありがてえやわ」

お客さんの家から移動販売車までいどうする度に、雪かきに追われることも・・・。

さらに、あまりの寒さに、商品の変色や凍ってしまうことがあります。

玲さん:「見て、バナナも色変わっちゃって、寒くて真っ黒になっちゃった。やばいよね、売れないなこれ」



玲さん:「移動販売をやっていると、ロスが絶対出てくる。それはマイナスだから・・・」

玲さん:「いろんなモノも高くなっているし・・・燃料代も上がっているわけだから。もう今は(収支は)トントン」

移動販売の経営は、決して楽だとはいえません。

それでも、常連客たちの雪国ならではの事情を考えると、この時期、値上げに踏み切れないといえます。

地元では、屋根や玄関前の雪を溶かすための装置で、冬場は電気代が跳ね上がる家庭が多く、年金暮らしの常連客の生活を思うと、値上げはできないといえます。

■ 家族のような支え合い「皆お母さんみたいな感じ」

玲さんが移動販売を始めたワケ。それは3年前、家族で経営していた、この地域唯一のスーパーを閉じたことにありました。



玲さん:「もう負い目だらけ。必要とされるって、いつも思っていたから。だから本当に辞める時の決断って言うのは、すごく迷った・・・」

経営状況の悪化から、やむなく閉店を決断。地元の施設向けに販売を続けていましたが、買物弱者にしてしまった常連客への申し訳ない思いが、日に日に募っていったといえます。

そこで玲さんは、閉店からおおよそ1年半後、移動販売をスタートさせたのです。

只見町に熱意を伝え、高齢者の生活を支援する事業として、車を借りることが出来たのです。

玲さん：「閉める時にも言われていたんですけども、“本当になくなると困る”って。だから、やっとなんか恩返しが出来たかなと」



一度は買い物弱者にしてしまった住民たちに、二度と不便な思いをさせたくない。そんな玲さんの思いに、住民たちも応えてくれているといいます。

常連客:「玲ちゃん持ってくるようなのは、市街地に行っても買わない。玲ちゃん支援したいから」

常連客:「無理して体壊さないで、頑張ればいいな一っ。娘のような感じ」

去年8月、一緒に移動販売を回っていた、母・たか子さんが、がんで他界。大きなショックから立ち直れたのも常連客の支えがあったからだといいます。

玲さん:「もうお客さんとも泣きながらやっていた。皆、お母さんみたいな感じ。いっぱいお母さんいる感じ。私にとって欠かせない人ばかり、もうただただ優しいなって、感謝の気持ちでいっぱい」

凍える寒さの豪雪地帯に、暖かな家族のような支え合い。

■ 知らない間に、たくさんのお客さんに支えられてた

玲さん:「お店でやっていた時も、知らない間にたくさんのお客さんに支えられてたんだなっていうのはやってる時はわからなかったんですけども。こうやって(移動販売を)始めてみて、これだけの人たちに支えられていままで出来てたんだなあ、ということをすごく実感してる。」





■ 私の歳になっても、まだまだできることはある

玲さん:「若い頃なかなか思い切ってできないことって多いと思うんですけども、場所によってできることがあると思うので、田舎だからできる事にもできれば挑戦していただきたいなって思う。私の歳になっても、まだまだできることはあるよって。」

「一つのことをやり遂げるってこともすごく素敵なことだと思うんですけども、いろんなことに挑戦するっていうのも一つの手かなと思っています。」

玲さんの奮闘は、今日も続きます。



有限会社 うおかく

角田 玲
つのだ れい

福島県只見町出身。
只見町で移動販売事業「ただみ ほほえみ便」を立ち上げ、地域の生活インフラを担う。

移動販売人

角田 玲さん(48)